

* 27cm 経緯儀発見

またまた、基線尺倉庫を漁った。今回は当ても無く探索に入ったわけではない。先日プラン子午儀を発見した際、奥の棚に「27cm 纏経緯儀」と書かれた木箱（写真1）を見つけていた。奥まった所にあり、すぐには手をつける気にならなかったのを、意を決して調べてみようと思った。



写真1 27cm 経緯儀と書かれた木箱

写真1に見られる備品番号もさることながら、手形と言おうか、足跡と言おうか、狸の爪あとがはっきり見て取れる。そうか、この倉庫は鉄筋コンクリート製だが、窓ガラスは悉く割れている。狸の住処になっていても不思議ではない。

さて、手前のものをどけて、木箱の扉の部分を手前にむけて扉を開いてみた。あった！経緯儀の架台部分（写真2）である。先ずはその状態で写真を撮り、扉を閉めて、そこいらにあった角材をルールにして引き出した。27cm が何を意味しているかは、今までの経験からきっと目盛環の直径であろうことは想像がついていた。1875年製のトロートン・シムス経緯儀は24吋経緯儀と書かれていた。そして高度軸の目盛環の直径が24吋(60cm)であった。その寸法がトロートン・シムス経緯儀の素性を突き止める役に立ったのであった。

この27cm 経緯儀は、見つかったこの架台の姿から高度軸に27cmの目盛環は到底入らない形をしている。そこで水平軸の目盛環が27cmと思えた。さて、経緯儀の架台部分が見つかった。次はこの経緯儀の望遠鏡部分を捜さねばならない。



写真2 見つかった27cm 経緯儀の架台部

この架台部分の入った木箱は棚の西端の一番下の段にあった。棚の近くを探索すると、この木箱のあった場所から1区画奥の2段目の棚に細長い木箱が2個あることを発見した。まず上の木箱を開いてみた。どうも違うようだ。そこでその下のもう少し大きく長い箱(写真3)を引きずり出した。表書きにまさにそのものが書いてあった。

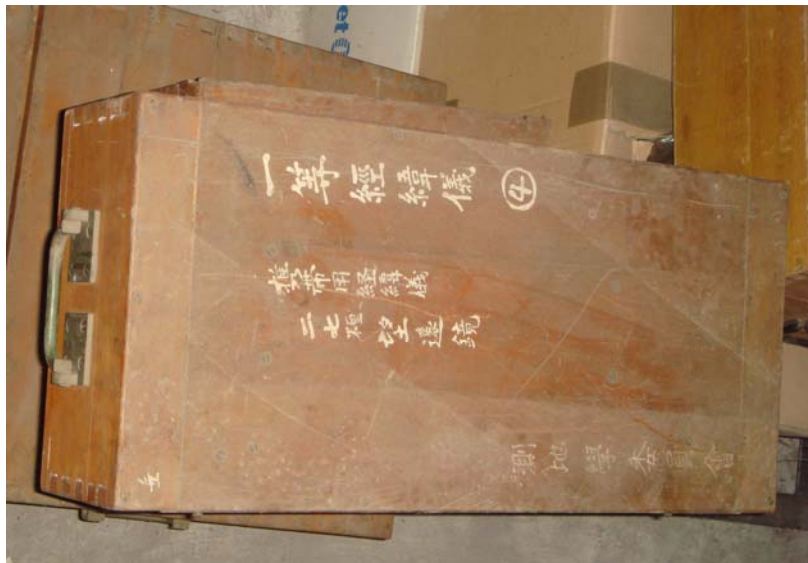


写真3 27 口径経緯儀望遠鏡の木箱

踊る気持ちを抑えながら木箱を開く、あった！まさに経緯儀望遠鏡(写真4)である。これ

もまた、金色に輝く鏡筒だ。こうして発見されるお宝の多くはこのように「金色」に輝いて発見されるのである。



写真4 金色の輝く 27cm 経緯儀望遠鏡鏡筒部

またまた、「お宝発見」である。さあ、明日にも助っ人を得て天文台プレミュージアムに運び、復元、展示しよう。乞う！助っ人！若者よ！